

第 136 回 『わかるように伝えていますか』

香川大学教育学部 特別支援教育領域 教授

香川大学教育学部附属幼稚園 園長

香川大学学生支援センター バリアフリー支援室 室長

坂井 聡

前回の続きです。ASD のある児童生徒が、新しい環境を迎える場合、どのようなことが課題になるのでしょうか。

前回にも書いたように特徴的な症状のなかでも、強いこだわりは、新しい環境を迎えるうえで特に配慮しなければならない特徴であると思います。ASD のある児童生徒は、これまでの学校生活で自分なりの手順や順番などを作り上げてきています。それは、見通しを持って、安心して学校生活を過ごすことができるように、自分なりに工夫してきた結果です。しかし、生活環境が新しくなるということは、学校生活等に適応するために自分なりに作り上げてきた手順の再構築を意味するのです。つまり、自分なりの手順やルールなどをもう一度新しい環境に合わせて作り直さなければならないということなのです。これは、ASD のある児童生徒にとっては、大きな困難を伴うであろうことは容易に想像できるのではないかと思います。

誰もが経験することだと思いますが、ある時を境に環境が変化し、手順や順番が新しくなると、その手順や順番に慣れるまでには時間が必要になります。そのような状況下でも、コミュニケーションすることや、対人関係を築くことが苦手であれば、人に手順を尋ねたり、援助を求めたりすることができるため、比較的容易に不安を取り除くことができるでしょう。また、今、置かれている状況を想像し、行動した結果をシミュレーションすることができれば、解決できることもあると思います。

しかし、周りの人との関係が築きにくいという点に、コミュニケーションも苦手な ASD のある児童生徒の場合、困ったことを解決するために、周囲の人に援助を求めることはとても困難なのです。また、新しい環境がどのような環境なのかも想像することができにくいのです。そのような気質をもっている ASD のある児童生徒の場合、状況が変化することによる不安が、主流と言われる人たちよりもより大きくなるであろうことは想像に難くないでしょう。

「困ったときには、誰に尋ねればいいのか？」「わかるように説明してもらえるのだろうか？」、「どんなクラスで、どんな人がいるのだろうか？」、「担任の先生には、理解してもらえるのだろうか？」、「どんな授業なのか？」、「席はどこ？」、「自分は受け入れられるのだろうか？」、「周囲の音は、明るさは？」、「カリキュラムは？」、「テストは？」、「留年はしないだろうか？」、「トイレの場所は？」等、新しい環境への不安が次から次へと押し寄せてくるような状況におかれるのです。ASD のある児童生徒にとって、新しい環境は、できることなら踏み入れたくない場所になっているということなのです。しかし、時間は常に流れています。その時々に応じた新しい環境を受け入れないまま生活することなどできはしないのです。では、どのような方法で、新しい環境への不安を取り除いていけばいいのでしょうか。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了 香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部特別支援教育領域 教授。1997 年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。